

3) フロストシーディング（初冬季は種）

フロストシーディングは、初冬時期には種して発芽させずに種子のまま越冬させる技術です。霜（フロスト）が降りる初冬には種（シーディング）することからフロストシーディングもしくは初冬季は種と呼ばれています。発芽は、春には種するよりも早く、雑草との競合に有利で、忙しい春作業の分散にもなります。

フロストシーディングには、次のような留意点があります。

①は種草種

イネ科牧草をは種します。マメ科牧草は、イネ科牧草に比べて低温でも発芽しやすく、は種直後に発芽した個体は越冬できず枯死してしまうため、翌年以降に追播します。

このことから、マメ科牧草を混播したい場合は、翌年の追肥時に肥料とともに追播するか、追播機を用いては種する必要があります。

②は種量

慣行は種に比べて発芽後の個体数が少なくなる傾向があるため、2割程度増量する必要があります（チモシーの場合は 2.5kg/10a 程度）。

③は種不適地

傾斜地は種子が融雪水で流されやすいため、適しません。

④は種後の鎮圧

草地更新の場合、発芽ムラを抑えるため、は種後は鎮圧を行うのが基本です。なお、フロストシーディングの時期は土壌水分が多く、鎮圧時のローラーに土壌・種子が付着しやすくなります。

土壌表面が凍っている朝に鎮圧を行うことにより、土壌・種子の付着を軽減できます。

⑤は種時期の目安

フロストシーディングの追種適期は「日平均気温が 6℃以下になる時期以降で、なおかつ、日平均気温 7℃以上の日が 3日以上続くことがなくなる時期～根雪始まで」とされています。



写真 V-8 は種の様子



写真 V-9 翌年春の様子